

## 内観療法の思想的背景

——西洋文化との比較およびヴェーバー理論の研究を通して——

長山 恵一

集中内観の治療設定が巧妙に組み立てられているのは実践的で手続き的な知を重視する日本の文化伝統と深くかかわっている。西洋社会では概念的で合理的な説明が重視され、日本では実践的なワザの知が重視される傾向が強い。西洋と日本で知の評価が対照的なのは、究極者が西洋では論理的な秩序性にかかわるロゴスに、日本では呪術技術的なワザとの関連で把握されてきたことと関係する。2つの知のいずれにおいても知の構築化と脱構築の2つのモーメントがあり、知の変革・革新にかかわる脱構築は直感的で全体的な経験相であり、西洋のキリスト教社会ではそれは三位一体のヒュポスタシス・ペルソナで表され、日本では神道的な「すむ」で把握されてきた。両者はともに天地創造のモチーフとして「液体の中の沈澱」にかかわっている。精神療法の自己洞察のプロセスは患者の手続き的な知の脱構築の経験にほかならない。人間の2種類の知と知の構築化と脱構築のモーメントを論じたのがヴェーバー理論であり、彼の理論を精神療法の観点から論じることで、支配の正当性や天皇制の本質を理解するための新たな鍵を手にする可能性がある。

<索引用語：内観療法、マックス・ヴェーバー、すむ（澄む＝住む）、三位一体論>

### はじめに

内観は吉本伊信が浄土真宗に伝わる「身調べ」をもとに創り上げた「内観法」という精神修養法が基盤となっている。内観の思想的背景を浄土真宗という切り口から読み解く方法もあるが、本稿では「集中内観」の技法や治療構造が「型」として巧妙に組み立てられているという特性に着目し、日本文化の「ワザの知」重視の切り口からその思想的背景を普遍的な観点から論じてみたい。

### I. 2種類の知（ワザの知とロゴスの知）の普遍性とダイナミズム

2種類の知は脳科学や認知科学・認知社会学・労働過程論など、多くの学問分野で西洋、日本を問わずに研究されている。そもそもワザの知は本

質的に状況依存的・文脈依存的であり、一方、論理や概念は本来的に状況や文脈と切れている、あるいは距離をとるのが特徴である。認知科学的に前者は「手続き的な知」に、また後者は「宣言的な知」に対応している。「ワザの知」にも「ロゴスの知」にもそれぞれ構築化（制度化・組織化・合理化）と脱構築（変革・革新・修正）にかかわるモーメントが存在し、日本文化で重視される非作為性や自然な成り行きの重視は Balint<sup>1)</sup>の精神分析の臨床経験からも明らかのように、作為との関係でしか意味をなさない。自然な成り行きや全体的体験、インスピレーションといったものは手続き的な知でも論理合理的な概念知でも行為や知の脱構築にかかわる未分節で直感的で全体的な経験相、すなわち創造における退行的経験の特性に共

通する。

自然科学における理論や概念は、実験すなわち実践技術的なワザの知の知見によって修正され脱構築されなければドグマに墮してしまう。同様に、実践合理的な行為にかかわる「型」の知恵も論理合理的な知のモーメントによって脱構築されなければ、硬直化して社会の変化に対応しきれず、次第に型が自己目的化し実践的な有用性が棄損されかねない。ロゴスの知もワザの知も、もう一方の知のモーメントの活用により、ダイナミックに脱構築され活性化される。集中内観は適用が合うと治療的な切れ味が鋭いことは臨床経験<sup>10)</sup>としてよく知られている。しかし、治療の応用工夫を行う際には、それが有効であればあるほど、逆に阻害要因として働く。有機的に組み立てられた治療構造や治療技法・技術は変革に抵抗する側面があり、これを認知社会学者の福島<sup>2)</sup>は「ワザの知」における「熟練の煉獄」と呼んでいる。

## II. 西洋と日本における「ロゴスの知」「ワザの知」の社会的な位置づけの違い

西洋ではワザや技術にかかわる職人層は社会的に低くみられており、論理合理的な思考や概念知、ラテン語にかかわる聖職者がキリスト教会との関係で支配者層を形成し、聖職者の教育機関から大学や諸学問が生まれている。一方、日本では黒田の「権門体制論」<sup>6)</sup>にあるように呪術・技術的なワザをつかさどる人々が歴史的に公家・寺(社)家、武家として支配者層を構成してきた。西洋文化における知の主旋律は論理合理性にかかわる「ロゴスの知」であるが、17世紀西洋で勃興した科学革命は社会文化的に副旋律であった職人層の「ワザの知」が「ロゴスの知」と結びつくことで生み出されたブレーク・スルーであり、科学思想史的には「頭と手の結婚」と称される。異質な2つの知が相互に交流する前提として、16世紀の西洋社会では宗教文化、政治、言語などさまざまな領域において大きな変動が同時並行的に起き、伝統的な知の枠組みが地殻変動を起こしていた<sup>20)</sup>。西洋とちょうど正反対なのが日本の社会や文化の歴

史である。日本における知の主旋律はあくまで呪術・技術的な「ワザの知」であり、それが論理合理的なロゴスの知と出会ったとき社会文化的な変革・変容が歴史的に起きている。1回目の文化社会的大変動は中国文明との接触による国の文明化である。白村江の戦いに敗北した当時の日本は東アジアの動乱を機に急速に唐の律令制を取り入れて、天武天皇が律令天皇制を作り上げた。社会支配体制としてはそれが変容しながらも江戸時代まで続いてきた<sup>7)</sup>。2回目の大変動は幕末・明治維新である。西洋列強の植民地政策で中国が植民地化され、日本は西洋近代文明を携えた列強諸国から植民地化される国家的な危機にあり、これを契機として日本は西洋近代文明を取り入れて、明治維新や文明開化が起きている。

「知の固定化」を避ける鍵は、西洋の場合は歴史的文化的に「ワザの知」をどう取り入れるかがポイントであり、一方、日本では論理合理的な「ロゴスの知」とどう向き合うかがポイントであり、「知の固定化」を打ち破るインパクトが西洋と日本の場合では対照的な形になっていることが歴史から理解できる。

## III. 日本で「ワザの知」が、西洋で「ロゴスの知」が重視される宗教思想的な理由とは何か

日本で「ワザの知」が、西洋で「ロゴスの知」が重視される宗教思想的な理由は、それぞれの文化の主旋律の「知」の脱構築・変革の経験がそれぞれの社会における宗教的超越者・絶対者の表象を喚起させるからにほかならない(著者は脱構築をここでは構築化の対概念として使っており、Derridaのいう脱構築とは意味が異なる)。西洋キリスト教社会における神と日本の神祇信仰・神道の究極者の捉え方は根本的に違う。ワザの語源は「深く隠された『神意』のこの世への顕現」であり、それは本来的にカミワザであり、宗教学的には Eliade がいうヒエロファニー(聖体示現)にほかならない。カミとは「山奥に隠れていてよく見えないもの」が原義であって不可視性を意味しており、それが神意として顕現するのがワザ・カミ

ワザ・タタリである<sup>11)</sup>。現代では技術を意味するワザ(技)は、本来的に異界・他界・彼岸と現世との間に「通路が開かれる」ヒエロファニー的な出来事であるが、そうした呪術的な意味合いの「ワザ」が実践合理化されることで方法論としての技術になったとされる。日本の宗教では実践的な修行の中で超越が経験され、矛盾が体験的に克服されるという特徴があり、これが天台本覚思想であり日本文化や諸宗教の共通項だと栗田<sup>5)</sup>は指摘する。

他方、西洋的な超越者はロゴスとしての神であり、それはキリスト教以前のギリシャ神秘思想やギリシャ数学にまで遡ることができる。それはピュタゴラスの定理とピュタゴラス教団の関係によく表れている。数学的論理合理性・秩序性は西洋においては超越者の第一の特性であり、Pythagoras やピュタゴラス教団にとってピュタゴラスの定理という数学的秩序性は神そのものにほかならない<sup>19)</sup>。

「ロゴスの知」と「ワザの知」では、知のあり様から、学習の仕方、そこでの人間関係のあり様まですべてが異なっている。しかし、こうした異質な知の間には「知の脱構築」をめぐる驚くべき体験的・現象的な共通性が存在する。キリスト教がローマ帝国の国教になって以降、論理合理的な秩序性を重視する西洋社会は、人であり同時に神であるという矛盾したイエス・キリストの存在を宗教教理的にどのように「論理合理的」に説明するかの難問について数百年かけて三位一体論やキリスト論を神学的に整備してきた。この数百年にわたる議論の中から西洋的な個の概念が生み出されてきた経緯を坂口<sup>17)</sup>は詳細に論じている。そこで最も重要なのは、ヒュポスタシスというギリシャ語(語源は『液体の中の沈澱』)をローマ帝国の公用語であるラテン語にどう翻訳するかであった。ラテン語の候補としては substantia と persona の2つがあり、結局後者が選ばれ、三位一体論の第二位格のキリストを表すものとして、ヒュポスタシスはラテン語のペルソナに翻訳されることとなった。

一方、日本において超越者は呪術・技術的な実践合理的な行為の超越性・異界性にかかわる「カミワザ」「ワザハヒ・タタリ」として呪術政治的に位置づけられてきた。ここから神祇信仰にかかわる神道的な清明心や「すむ」が発生してきたことは西郷<sup>16)</sup>や呉<sup>4)</sup>の研究で知られている。つまり、「ヒュポスタシス(=ペルソナ)」も「すむ(澄む=住む)」も「知の脱構築」にかかわる「天地創造」の元型的体験である「液体の中の沈澱」を共有している。「液体の中の沈澱」とは濁った泥水をそのまま放置しておくで自然に透明な上澄みと下方の泥の沈殿層とに分かれる出来事を指している。西洋と日本では「液体の中の沈澱」に関連して強調点の違いはあるものの、存在主体や洞察的理解を表す言葉がともに「液体の中の沈澱」に由来するのは驚くべきことである(図1)。著者<sup>9)</sup>はかつて自己洞察の体験の諸特性を整理して、そこから Balint の「フィロバティズム」や「新規蒔き直し」にも通じる「すむ-あきらむ」論を提唱した。これは通常精神療法の用語で表現すれば防衛処理の過程や抑うつ態勢の通過にかかわる出来事であり、思想文化的にそれは「液体の中の沈澱」現象にそのまま重なる。

#### IV. ヴェーバー理論の原理的研究と精神医学・精神療法の研究が関連する理由とは何か

ここまで「ワザの知」「ロゴスの知」という知の種類と知の構築化と脱構築の2つのモーメントが重要であることを指摘してきた。この問題に正面から取り組んだのが社会科学の巨人 Max Weber である。彼は自然科学と社会科学を本質的に分けるポイントは、人間の価値・意味づけの有無であることを哲学者 Likert を援用しつつ認識論的にはじめて定式化した<sup>8)</sup>。彼は人間の行為・コミュニケーションを人間の価値(意味づけ)を中心に組み立て、行為論的社会学・理解社会学を方法論的に構築した。人間の価値や意味づけの「歪み」を臨床実践的に扱うのが精神療法にほかならない。

これまでのヴェーバー研究では長らく Marx との関係が重視されてきた。しかし、近年では Jas-

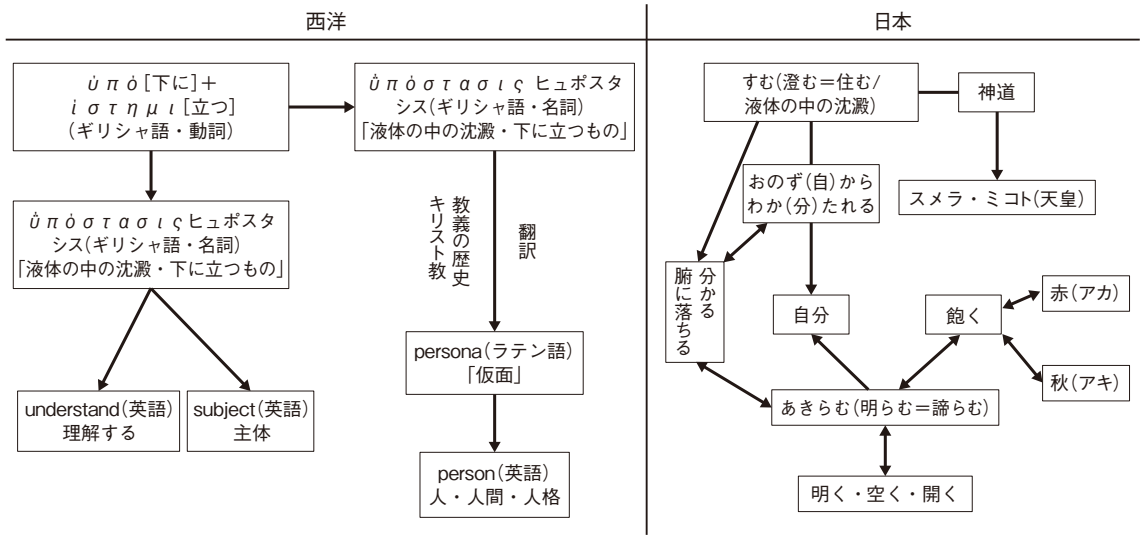


図1 「液体の中の沈澱」にまつわる西洋的心性と日本的心性

pers, Freud, Kraepelin との関係がヴェーバー研究では重視されている<sup>15)</sup>。Weber が活躍した 19 世紀末から 20 世紀初頭に、Jaspers は精神病理学を、Kraepelin は精神障害の診断を、そして Freud は精神分析を創始したことは言うまでもない。社会科学・人間科学の黎明期にあった当時の西洋の学問的世界において、研究者たちの交流の場を中心に、諸学問の成果を取り入れたのがほかならぬ Weber である。Jaspers は Weber の最も近い弟子であり、Weber の死後、追悼記念講演を行っている。Weber と Jaspers の学問的方法論はほぼ同じであり、Weber 晩年の主著『経済と社会』の方法論にかかわる 2 つの論考において、重要な引用文献として Jaspers の「精神病理学総論」が挙げられている点が近年のヴェーバー研究では着目されている<sup>21)</sup>。わかりやすく言えば、理解や了解といった物事の捉え方を精神的な症状に適用して近代的な精神医学的診断学を創始したのが Jaspers であり、同じ方法を社会や文化という集団に適用して社会文化的診断と類型化を試みたのが Weber の理解社会学である。Weber は Kraepelin と共同研究を行っており、工場労働者の精神衛生や心理にかかわる論文を書いている。Weber は

Freud と直接会ってはいないが Freud に並々ならぬ関心を寄せていたことはよく知られている。ヴェーバー支配論の鍵となる「カリスマ的支配」は概念規定や本質理解の面で、それは Freud が精神分析で発見した転移・逆転移を社会的支配関係に焼き直したものにほかならない<sup>12)</sup>。Weber は当時のフロイト学派の特異な集団のあり様を外側から観察し、そこから「カリスマ的支配」のヒントを得たことが近年のヴェーバー研究では指摘されている<sup>18)</sup>。さらには、Weber の方法論で特徴的な用語「行為の合理化」は、従来、行為を論理合理的に行うことだと解釈されてきたが、近年のヴェーバー研究では、それは間違いであり、行為を特定の目的のために首尾一貫させるという意味合いで Weber はその語を使っていることが明らかにされている<sup>21)</sup>。そのような人間の行為は Freud や Anna Freud が精神療法の領域で開拓した人間の防衛機制・適応機制論にぴったりと重なる。Weber の宗教社会学に目を転じると、そこで最も重要なのは「禁欲」と「観照」の対概念であるが、彼が「観照 (= 神秘論)」という用語で記述し、理論化しようとした出来事は、内容的には精神療法でいえば防衛処理・自己洞察の体験プロセスその

ものにほかならない。Weber は死の直前まで「禁欲」と「観照」について試行錯誤を重ねたものの結局うまくいかなかったことが金井<sup>3)</sup>の研究で明らかにされている。

つまり、Weber の理論は精神病理学的な診断学や精神療法的な防衛機制論、さらには精神療法実践における禁欲や自己洞察の問題と深くかかわることがわかる。精神医学や精神療法の原理的な研究に関連させてヴェーバー理論を理解することは極めて重要であるが、残念ながらこうした視点からヴェーバー理論を読み込もうとした精神科医、精神療法家は今まで誰もいなかった。

#### V. ヴェーバー理論の混乱と日本の精神療法理論（阿闍世理論と甘え理論）の混乱の同形性

人間の行為や体験を理解するとき、知の様式の違いと知や行為の構築化と脱構築の2つのモーメントがともに重要であるが、Weber はこの点を十分に理解していた。しかし、彼は行為論的社会学を近代的な社会科学として確立する必要性から、人間の脱構築にかかわる退行的で全体的な経験のモーメントを意図的に理論の枠組みから外す形で理論構築を行おうとした。行為の構築化・合理化にかかわる諸問題は、ヴェーバー理論では極めて整合的・緻密に議論され組み立てられている。しかし、彼の理論には脱構築のモーメント（支配論の用語でいえば「カリスマ状態」、宗教社会学の用語でいえば「観照（＝神秘論）」）がうまく組み入れられておらず、理論が解決不能なジレンマに陥っている。彼の社会学の基盤である社会科学的認識論は、理解の二相、すなわち未分節・無構造な直感的経験相である「現実理解」と分節化された経験にかかわる「(因果的) 説明的理解」の2つから構成されている。前者の「現実理解」はWeber が哲学者 Dilthey との対峙を経て直感的理解に資する劣位の経験相として提唱したものだが、従来からその内容が後者の「説明的理解」に比して曖昧だと批判されてきた。つまり近代的な分析論理に立脚する Weber はポストモダンの思想にもつながるこうした経験の二相性をせつかく提唱しな

がら、前者の経験相を抑止・排斥しつつ理解社会学の方法論や支配社会学、宗教社会学、法社会学を構築するというアクロバティックな試みを行っている。ヴェーバー理論が解消不能な二面性を持ち、100年以上人々を惹きつけてきた魔力をもつのはこうした事情であることを著者<sup>13)</sup>はヴェーバー研究で明らかにしてきた。

ヴェーバー理論の矛盾や混乱と同じ図式が依存的な行為の構築化（合理化）に関連して起きているのが阿闍世理論や甘え理論にほかならない。両者で違うのは、第一に扱っている事象や理論化の範囲あるいはスケールが違うこと。ヴェーバー理論は人間の依存的行為だけにとどまらず、より広範囲な人間の諸行為や社会的秩序の形成全般にかかわる問題が論じられている。第二の違いは、日本の精神療法理論もヴェーバー理論もともに行為や知の脱構築のモーメントが理論にうまく組み入れられなかった点は同じであるが、日本の精神療法理論の場合は、脱構築のモーメントが理論に欠落しているという認識自体に乏しく、ある意味で問題のあり様が単純である。ところが、ヴェーバー理論の場合、Weber は脱構築のモーメントの重要性を明確に自覚しており、理論化に際して、理論が表面上破綻しないようあるいは矛盾をきたさないよう細心の注意を払って、相当意図的にごまかす形で理論構築が試みられている。このため、問題の所在が実にわかりにくく隠蔽されてきたといえる。

#### おわりに

集中内観という「ワザの知」にかかわる思想的問題を論じる場合、2種類の知のあり様の違いと相互の関係、そして各々の知の構築化と脱構築のモーメントを考慮した上で議論をしないと、単なるステレオタイプな文化論の話に終始してしまい、文化理解の面でも臨床への提言という点でも実りあるものは生まれない。ヴェーバー理論はこうした意味で極めて重要であり、精神医学者・精神療法家がそれと深く対話することで社会科学や人文科学の重大問題である「支配の正当性」や「天

皇制の本質(「精神構造論」としての天皇制研究)」を理解するための新たな鍵を提供できると著者は考えている。

なお、本論文に関連して開示すべき利益相反はない。

## 文 献

- 1) Balint, M.: Basic Fault-Therapeutic Aspects of Regression. Tavistock Publication, London, 1968 (中井久夫訳: 治療論からみた退行—基底欠損の精神分析, 金剛出版, 東京, 1978)
- 2) 福島真人: 暗黙知の解剖—認知と社会のインターフェース, 金子書房, 東京, 2001
- 3) 金井新二: ヴェーバーの宗教理論, 東京大学出版会, 東京, 1991
- 4) 呉 哲男: 清明心の発生—宮廷寿詞から宣命へ, 文学の誕生 (古代文学会編), 武蔵野書院, 東京, p.107-134, 1977
- 5) 栗田 勇: 最澄と天台本覚思想—日本精神史序説, 作品社, 東京, 1994
- 6) 黒田俊雄: 権門体制論, 法蔵館, 京都, 1994
- 7) 水林 彪: 天皇制史論—本質・起源・展開, 岩波書店, 東京, 2006
- 8) 向井 守: マックス・ヴェーバーの科学論—ディルタイからヴェーバーへの精神史的考察, ミネルヴァ書房, 京都, 1997
- 9) 長山恵一: 母親への罪意識と母子分離をめぐる諸問題—「すむ—あきらめる」「すまない」を鍵概念として, 精神経誌, 96; 83-108, 1994
- 10) 長山恵一, 清水康弘: 内観法—実践の仕組みと理論, 日本評論社, 東京, 2006
- 11) 長山恵一: 天皇制の深層 (3) —「タマ」と「カミ」の接合の方法論・触媒としての「わざ」, 現代福祉研究, 7; 75-160, 2007
- 12) 長山恵一: ヴェーバーの理解社会学と精神科学 (精神病理学/精神療法学) (3) —ヴェーバーの支配社会学と宗教社会学の混乱—, 現代福祉研究, 12; 43-139, 2012
- 13) 長山恵一: ヴェーバーの支配の正当性論の再考 (4) —支配の〔正当性/正当化 (Legitimität/Legitimieren)〕の二相性について—, 現代福祉研究, 16; 1-67, 2016
- 14) 長山恵一: 「精神構造」論としての天皇制—赤坂憲雄の天皇制論の整理・検証を通して—, 現代福祉研究, 16; 69-118, 2016
- 15) 中野敏男: 解説 理解社会学の綱領的な定礎として, 理解社会学のカテゴリー (ヴェーバー 1913/海老原明夫・中野敏男訳 1990), 未来社, 東京, p.147-193, 1990
- 16) 西郷信綱: スメラミコト考, 文学, 43; 1-10, 1975
- 17) 坂口ふみ: <個>の誕生—キリスト教教理をつくった人々, 岩波書店, 東京, 1996
- 18) 佐野 誠: ヴェーバーとナチズムの間, 名古屋大学出版局, 名古屋, 1993
- 19) Singh, S.: Fermat's Last Theorem, Christopher Little Literary Agency, London, 1997 (青木 薫訳: フェルマーの最終定理, 新潮社, 東京, 2000)
- 20) 山本義隆: 16世紀文化革命, みすず書房, 東京, 2007
- 21) 矢野善郎: マックス・ヴェーバーの方法論的合理主義, 創文社, 東京, 2003

Studies on Naikan Therapy Focusing on Its Ideological Background  
—A Comparison between Japanese and Western Patterns of Thought  
and Reconsidering Max Weber’s Theory

Keiichi NAGAYAMA

*Department of Clinical Psychology, Faculty of Social Policy & Administration, Hosei University*

A deliberately crafted setting of intensive Naikan therapy has its base in traditional Japanese culture that attaches importance to practical and procedural knowledge. Whereas a rational explanation by using descriptive knowledge is valued in western society, Japanese society tends to value procedural knowledge. The contrast between these two values can be explained by a difference in understanding transcendent existences. In Western society, it has been understood in relation to logos related to logical orderliness. On the other hand, it has been understood in relation to WAZA, which has to do with a magical or hands-on knowledge.

Both types of knowledge involve two phases in a process of development ; construction and deconstruction. The deconstructive phase in which reformation and renovation of knowledge is induced consists of intuitive and holistic experience, which in Western Christian society is related to hypostasis-persona of the Trinity, while it is related to “sumu” from Shintoism in Japan. Both are symbols of the Creation, coming from the precipitative phenomenon, symbolized in liquid. Insight in psychotherapy is one with a person’s experience of deconstructing procedural knowledge. Max Weber has discussed over these two kinds of knowledge and its construction/deconstruction moments. Reconsidering Weber’s theory from a psychotherapeutic viewpoint will therefore give us a new key to understand the core of legitimacy of domination and a Tenno system of Japan.

< Author’s abstract >

< **Keyword** : Naikan therapy, Max Weber, Sumu, Trinity >

---